

研修報告書 No. 5

所 属： 国立国際医療研究センター病院

研修先： 大井田病院、渭南病院

沖の島へき地診療所

初期研修2年目の6月から7月にかけて高知県宿毛市にある大井田病院で4週間、土佐清水市にある渭南病院で2週間、沖の島診療所で数日間の地域医療研修をさせていただきました。

幡多地域は高知県の最西端に位置しており、東京の羽田空港から最も時間のかかる地域と言われているそうです。宿毛市の高齢者率は34.5%で全国平均の27.3%を大きく上回っているような高齢化が進んでいる地域でした。

私が初期研修を行っている病院は東京都の急性期病院であり、研修医として入院中の患者を担当するも、退院後に定期的に外来診察でお会いするわけでもなく、患者の入院中の姿しか知らないという現状にどこか物足りなさを感じていたところでした。

幡多地域では、患者の入退院前後の生活といった限定された部分だけではなく、この地域に住む住民全体の健康状態から普段の生活までを把握している様子が伺えました。中でも、乳児・小児健診でそれぞれの家庭状況や生育環境を知ったうえで診察している小児科医の姿や、訪問診療や訪問看護で家族の介護を労いながら患者と家族にとって最善の方法を策案しようとする医師や看護師の姿は印象的で、今までの自分は医療をまさに氷山の一角しか見えていなかったということを痛感しました。

地域研修期間中には、院内だけではなく、訪問診療、訪問看護、保健所、保育園、特別養護老人施設、デイケア、地域包括支援センターなど様々な施設を訪問する機会をいただきました。地域包括支援センターは、名称は耳にしたことがあるものの、具体的にどのような役割を担っているのかは理解しておらず、あまり馴染みのない施設でした。実際に訪問させていただき、医療機関の受診を拒否しており介護認定申請も出来ず困っている方のご自宅に定期的に訪問することで支援をしている主任ケアマネジャーの姿をみて、我々医療者が目の届かない領域は思っている以上に広くあり、様々な職種の方が懸命に努力されていることを知りました。

また、今回の地域研修で忘れてはならないのは、人口120人程度の離島である沖の島診療所に行く機会をいただいたことです。離島に根付いた文化が多くあり、島全体が家族のような雰囲気にも包まれていました。医療を求めて何百の階段を昇降し診療所に来る島民たちに

対し、限られた資源のなかで最善の医療を行うことの難しさを知りました。

地域医療においては、患者のケアのみならず住民全体の健康の向上をも考える必要があります、そのためには公衆衛生的マインドが大事であるということをひしひしと感じました。また、地域が求めているのは我々が追い求めがちな専門性の高さというよりは、患者の健康生活を総合的に診察できる力であるということも感じました。

この幡多地域での研修は、残りの研修生活および今後の医師人生における医療のあり方、目指す医師像に大きく影響を及ぼすだろうと思いました。いつの日か何らかの形で地域医療に貢献できれば、と思いました。